
夫婦道

TOMESAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夫婦道

【Nコード】

N5812H

【作者名】

TOMESAN

【あらすじ】

上戸慶太と黒田咲によるドタバタラブコメディー

第壱話 出会い（前書き）

初投稿です。おかしいところがあると思いますが、読んでみて下さい

第巻話 出会い

駅前には車と道を行き交う人々でいっぱいだった。

上戸はこの人だかりを全速力で駆け抜けていた。

上戸は追われていた。

「待ってよ、慶太君。」

「待てません。」

上戸は、彼を追ってくる少女の方を振り向かずに答えた。

「ただ、慶太君が私と結婚して黒田組つけばいいだけの、話じゃない。」

背後からの少女の発言に恐怖をおぼえながら、上戸は全力で逃げながら、叫んだ。

「なんなんだー!!」

一時間前、上戸は本屋で、マンガを立ち読みしていた。

上戸が熱中していると背後に気配を感じた。

上戸が振り返ると、上戸より、年上だと思われる美少女が立っていた。

「あ、すみません。これ読みたいんですね。」

「違うわよ、慶太君」

「え？」

「どしたの？」

「さ、さっき、慶太君で、僕あなたと、初対面のはずなのに。」

「えー、だって慶太君は私の婚約者で、黒田組次期組長だもん。」

は？上戸は事態が飲み込めず、目の前できゃーと顔を赤らめる少女にちよつとド

キドキしながら思った。

にげよう。

上戸が向きを変えて逃げようとする。

「どうしたの慶太君？」

少女が可愛い顔で聞いてきた。

「え、いやちょっとトイレに。」

「逃げるきね。」

少女は素敵な笑みをうかべて言った。その笑みで、上戸の足はもう走り出していた。

そして、1時間近くこんな調子で追いかけていたのである。そして、体力にはわりと自信のある上戸でも限界に達しつつあった。やばい。

後ろである悲鳴を聞きながら、上戸は倒れた。

第貳話 思い出した

気がつくと上戸は知らない和室で寝かされていた。
どうなってるんだ。

上戸は寝起きの頭をフル回転させていると襖が開いた。

「慶太くーん、お粥もってきたよ。」

エプロン姿のさっきの少女が上戸のまえに現れた。
あ。

上戸は少女を見てすべてを思い出した。

「あのー、あなたはいったい誰なんです。」

「もー、ひどいな慶太君忘れたの。」

少女はほほをふくらませた。

「黒田咲だよ、黒田咲。昔よく一緒に遊んだでしょ。。。。」

「さ、咲ネエ？」

上戸の中で幼き日の記憶がよみがえる。

十年前

慶太の近所には泣く子もだまる黒田組があった。

当時六歳だった慶太はそんなことは知らず、その一人娘で二つ年上だった咲とよく遊んでもらっていた。

「ねー、慶太君。」

「どーしたの咲ネエ？」

咲の膝の上に乗っていた慶太は咲を見上げていった。

「私、しばらく慶太君に会えないかもしれないの。」

「え？」

上戸は泣きそうな顔になった。

「どうして。」

「私、お引越しするの。」

「えー、そんなのいやだよ。咲ネエ」

慶太は咲にすがりついた。

「私もいや。だからお父さんにどうすればいいか聞いたの。」

「おじちゃんなんて言ったの？」

慶太は不安そうに聞いた。

「うん、十年待ってもらって慶太君と結婚して黒田組の跡取りになってもらえだつてさ。」

「うん、ぼく咲ネエのためならなんでもするよ。」

「うれしい。じゃ、約束ね。」

そういうと咲は慶太を強く抱きしめた。

あのことか

上戸は今考えると結構恥ずかしい約束を思い出した。「ごめん、今まで思い出せずに逃げちゃって。」

上戸は頭を下げて謝罪した。

「……………」

上戸が頭をあげると咲は泣いていた。

「ど、どうしたの咲ネエ。」「慶太君が私のことおぼえてくれたー。」

そう言うとき咲はおもいきり上戸に抱きつき、やわらかな唇で慶太の唇をふさいだ。

「！！」

上戸はいきなりの出来事にあたふたしていると。

咲は唇を離した。

「私を慶太君のお嫁にして下さい。」

咲は顔を赤らめて言った。

「こんなぼくでよければ、喜んでだよ、咲ネエ」

そういうと慶太は咲を抱きしめた。

「咲く。」

突然襟が開かれ、着物を着た白髪のかっこいいおっさんが泣きながら入ってきた。

「組長！！お嬢！！おめでとうございやした。」

おっさんに続いてぞろぞろとヤクザな方々が入ってきた。

「え？」

上戸は咲が極道の女であることをすっかり忘れていた。

第三話 お義理父さんと

今現在、上戸のとなりには咲そして正面には白髪のおっさんがいた。

「僕が咲の父親の正信だよ。よろしくね、慶太君。」

おっさんは笑顔で上戸に言ってきた。

「あ、あのおじさん。」

慶太が戸惑いがちに言う

「だめ、だめ、お義理父さんて呼んでくれよー。」

と正信は笑顔で返してきた。

「お、お義理父さん」

「なんだい、慶太君」

「本当に、僕なんかと咲さんと結婚をみとめてくれるんですか？」
咲さんという単語に咲はちよつと赤くなる。

「認めるもなにも、僕はずっと二人が生まれる前から、その気だったけど。」

「「え」」

上戸と咲の声が重なる。「どういうこと、お父さん。」

上戸より先に咲が聞いた。

「あれ？言ってなかったけ。慶太君の父親の正宗と僕は親友でねお互い子供が生まれたら、結婚させようといってたのさ。」
マジかよ。

慶太は思った。正宗はごく普通のサラリーマンである。そんな父と黒田組の組長と交流があったとは考えられなかった。

「あいつはね、いまでこそ、普通だが昔は『拳の正宗』と呼ばれるほど強かったんだよ。」

正信は懐かしむように語った。

へーと父親の意外な過去を聞いていると、襖が開いた。

「のわっ。」

いきなり少女が上戸に抱きついてきた。

「へへ。」

「ま、舞ちゃん？」

かわいらしく笑う少女を見て上戸は言った。「こら、舞離れなさい。」

「

咲がキリつとにらみながら言う。

「えー、やだー。お姉ちゃんばっかずるいよー。」

と言い、舞は慶太を強く抱きしめた。

上戸がどうしようかあたふたしていると咲がドスのきいたこえで

「慶太君、浮気したらわかってるわよね。」

と言ってくるのでますます困った。

「修羅場だねー。」

正信はそんな三人をニヤニヤしながら見ていた。

第三話 お義理父さんと（後書き）

アドバイスください

第四話 極道の少女達（前書き）

遅れて、すみません。下手ですみません。

第四話 極道の少女達

咲との運命の再会から一日経った次の日の朝。

眠りから覚めた、慶太の腕には咲と舞が頭をのっけて眠っていた。

「っ……っ……」

慶太目の前で無防備に眠っている少女達を見ながらも必死に理性を保とうと奮闘していた。

「んん、大きくてこれ以上むりだよー。」

咲が寝言を言う。

「あっ、そこそこ、そこだよー。」

舞も寝言を言う。

「やめてくれー。」

慶太はたまらず叫んだ。

「「え」」

咲と舞は同時に目を覚ます。

「咲ネエ、舞ちゃん。何で僕の布団に入っちゃってんのさー。」

「「だって一緒に寝たかったんだもん。」」

見事に声がかぶり咲と舞は互いの存在に初めて気づいた。

「なんで、舞がここにいるのかしら。」

「お姉ちゃんこそ、なに私の、ケイちゃんに手を出そうとしてんの。」

「

極道娘二人は底しれぬ殺気を出しながら威嚇し合っている。

怖い

慶太はそう思いながら、昨日のことを思い出す。

あの後、乱入してきた舞を見て、おっさんが

「舞も慶太と結婚したいのかね？」

とたずねると、

「うん!!」

と年のわりにでかい胸を張って答えてしまったもんだから、娘に甘すぎるおっさんは、

「よし、だったら舞も嫁になれ。」

と言った。

「ちょっと、待っ」

慶太が言おうとしたら、

「もちろん、二人とも満足させてあげられるよね。」
と怖い笑顔で脅され、

「は・・・い。」

と慶太はうなづいてしまった。そして追い打ちをかけるごとく。

「あ、あと慶太君は今日からここに住んでね。」

と、とんでもないことを口にして。

「頑張りたまえハーレム大王」

と手を振りながら優雅に帰っていった。

ふと横を見ると咲は舞とにらみ合いをしている

「慶太君は渡さない」

「ケイちゃんは私のもの。」

と、言い争っていた。

そして今にいたる。

と、いうわけだ。

慶太は、目の前の極道娘達に頭を抱えていた。

第五話 やっと、登校、投稿？（前書き）

すみません。

遅くなりました。

第五話 やっと、登校、投稿？

やっとの思いで二人を説得した慶太は朝食をとり、咲とともに居間に向かった。

途中、咲が言った。

「うちの朝食はにぎやかだから、びっくりするかも。」

の言葉に疑問を持ちながらも、咲が居間のふすまを開けた。

「おはようございやす！！！！」

居間にいたのは二十人ぐらいの、ヤクザな方々だった。

しかも、全員テーブル囲んで正座していた。

「おはよう。」

咲は涼しげな顔をしながら返した。

一方慶太は、

「お、おはようございやす。」

まだ知らない世界の朝に、カルチャーショックをうけていた。

「いただきます。」

おっさんが言うのと、

「いただきます！！！！」

全員それに続いた。

食卓にはごはん、味噌汁、卵焼きといった朝食らしいものがのって
いた。

「う、うまい。」

慶太は思わず言った。

「ほー、慶太君。僕の料理は舌にあったようだね。」

「はい、かなりおいしいですって……、ええ！これおじさんが
作ったんですか。」

「うん、そうだけど。」

おっさんはさわやかな笑顔で言った。なんで、や○ざなのに家庭的なんだー!!

慶太は全力で心の中で、つつこみながらも、目の前の朝食を食べていった。

朝食を食べ終わると、慶太は咲とともに玄関に向かった。

すると、顔に傷のあるおっさん達が野太い声で、

「いってらっしえい!!」

など言うから、慶太は朝からまいってしまった。

通学中、咲の隣を歩く慶太は

「あれが、黒田組の跡継ぎよ」とか「あいつ、まじヤバいらしいぜ。」など言われ

周囲の者から恐怖の眼差しを向けられた。その視線を咲は感じているのか、咲は悲しげに俯いていた。

くそ言いたい放題言やがって

慶太はそう思いながら歩いた。

「咲ねえ、気にすることないって。」

慶太は咲に言ってやった。それを聞いて、咲は顔を輝かせて

「慶太くん!」

と言って抱きついてきた。

「何をしているんですか!!」

抱きつかれた慶太の背後から声が聞こえてきた。慌てて後ろを振り向くとそこには、バラの騎士と言われる生徒会の美空 楓が立っていた。

第五話 やっと、登校、投稿？（後書き）

何かアドバイスをよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5812h/>

夫婦道

2010年11月24日05時35分発行